

田舎暮らしを楽しむ

(5)

佐藤 彰啓



思い描いた農村のイメージに合った岩手県遠野市に移り住んだ石川さん

田舎暮らしの「新天地」は、都会(居住地)から気軽に往来できる三時間圏内の近場を選ぶ人が多いと前回書いたが、近年は遠隔地を選ぶ人も増えてきた。

リタイア後の夫婦が遠隔地を選ぶ動機には、趣味の実現というものが多い。スキーがやりたくて北海道に、釣り三昧(ざんまい)の暮らしがしたくて九州に、という例である。現役時代にやりたくてもできなかったことを自己実現する。これも田舎暮らしの大きな目的の一つである。

大手商社を定年退職したのと同じ時に、東京都杉並

やりたいこと、遠隔地で実現

地域選び(中)

区から岩手県遠野市に移り住んだ石川洋さん(65)。三重県で育ち、京都の大学に通った。商社時代は海外駐在が長く、遠野とは何の縁もなかった。

「馬を飼って、朝夕散歩ができたら…」というのが石川さんの夢。それを実現するには一万坪(一坪三・三平方メートル)以上の広大な土地が必要だった。その条件を基に探し当てたのが、遠野にある元開拓農家の農地二万八千坪、山林二万七千坪の物件だった。

このほか、カナダに滞在したことがある証券マンが、気象条件や風景がカナダに似ているという理由で、退職後に北海道の原生林の中に移り住んだ例もある。一般的に海外赴任を経験した人が遠隔地を選択する傾向が強いようだ。

都会に家を残したまま遠隔地にも住まいを求める人もいる。千葉県八千代市に住む染谷実さん(63)は、定年前に北海道にログハウスを建てた。リタイアした今、五月から十一月は北海道、冬は千葉の家で暮らす。交通費は年二回しかかからず、北海道の方が生活費は安いいため、かえって経済的という。そんな暮らしも、これからの高齢社会では増えてくるだろう。

日本の田舎も便利になった。車で三十分も走れば、スーパーや総合病院に行ける。宅配便で欲しいものは翌日には届く。インターネットのおかげで情報も都会と差はない。公営温泉があり、福祉施設も人口比では都会より恵まれているところが多い。

(ふるさと情報館代表)